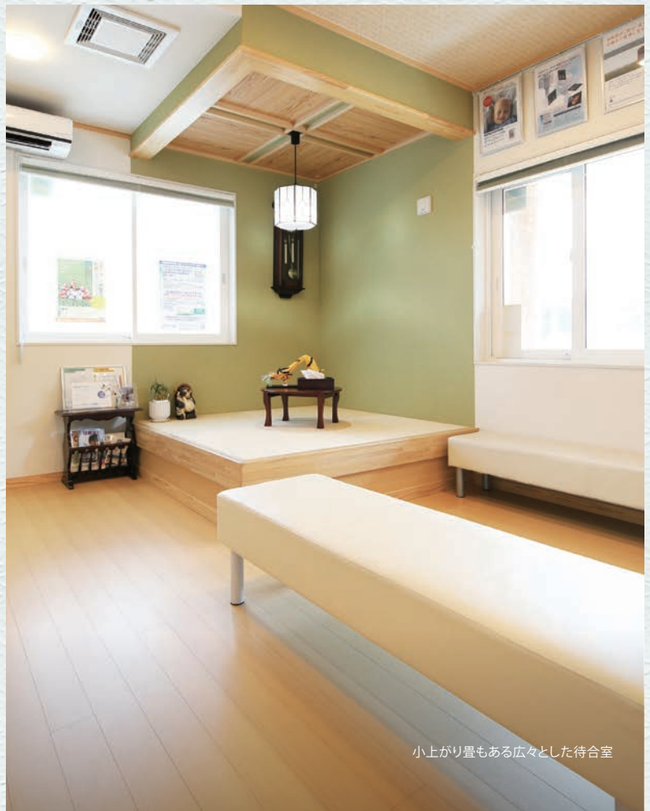
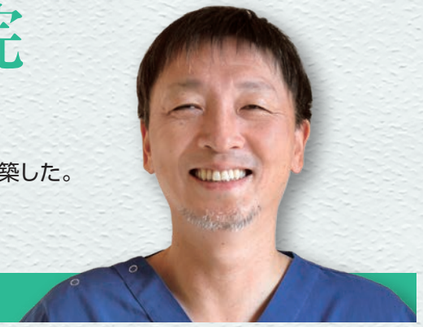
建物全体とマッチする堂々とした看板を掲げた玄関



小上がり畳もある広々とした待合室

東日本大震災後の時間を地域と歩み住民の暮らしに寄り添う歯科医院

岩手県沿岸部の山田町にある「内舘歯科医院」は、
東日本大震災を経て、1年半あまり前に歯科医院を移転新築した。
その歩みとこれからについて伺ってみた。



内舘歯科医院　院長 内舘 伯夫 先生

真っ白な和風の外観を持つ歯科医院を震災9年後に再建

「内舘歯科医院」は、岩手県の三陸沖に面した山田町の新しく造成された高台にある。2011年3月11日に発生した東日本大震災のあと、山を崩して作られた住宅地の一角だ。

神社や姫路城を彷彿とさせるような、ゆるやかにカーブした屋根の真っ白な平屋建ては、遠くからもよく目立つ。入り口に建つのは6本の大柱。建物のなかにも2本の大柱があり、それらの柱は、山田町を守る山田八幡宮の「八」の字にちなんで建てられた。

和風の建物にした理由を内舘伯夫院長はこう話す。

「和風の造りにこだわったのは、私が日本史を学ぶのが好きなことと、神社めぐりが趣味なことからです。壁や屋根を真っ白にしたのは、やはり歯のイメージから。健康的な白い歯を印象づけたいと思いました」

院内も和風の造りだ。待合室に子どもが遊んだり、お年寄りが腰かけられる小上がり畳のスペースがあったり、扉が障子や襖風になっていたり、通路の仕切りには大きなのれんが掛かっていたりしている。さらに珍しいのが診療室の壁面にまつられた立派な神棚だ。

「山田町は神社とのつながりが深い地域です。私も長年、山田八幡宮のお祭りで神輿の担ぎ手を務めていますし、今年1月からは関口神社の総代を拝命しました。歯科医院の建物が和風というのは珍しいですが、海が近く、緑も豊かな山田町の景観に溶け込んでいますし、いいアイデアだったと思っています」

「内舘歯科医院」の敷地内の庭には、しだれ桜やつつじ、さつき、梅、桃の木があり、季節で変わる植物の色合いが白い建物によく映える。そんな建物や内装を見ていると、「穏やかな暮らしが守られ、これからも長く続くように」と祈る内舘院長の気持ちが伝わってくるようだ。

焦らずに診療を続けながら歯科医院の再建を待つ

「内舘歯科医院」が開業したのは、2008年。町の中心部を通る国道沿いに自宅兼診療所としてスタートした。

しかし、東日本大震災で被災。山田湾に押し寄せた10.9mもの大津波に襲われ、建物が全壊流出した。山田町では、津波とその後に起きた火災により、亡くなったり、行方不明になったのは796名。3369棟の建物が倒壊している。

この日、内舘院長は午後から介護老人保健施設へ訪問診療に出かけていた。地震が起きたのは、歯科医院に戻り、休憩を取っていたとき。患者はいなかったが、